

歴史に学ぶ



ヒストリア  
**Historia**

2024.9.15

第8号

- 特集1 国宝瑠璃光寺五重塔保存修理事業
- 特集2 山口鷺流狂言保存会70周年
- 特集3 山口ヒストリア講演会8 「大村益次郎と木戸孝允」講演要旨  
山口市菜香亭 開館20周年記念イベント情報

# 国宝瑠璃光寺五重塔 保存修理事業

国宝瑠璃光寺五重塔は、現在覆いがかけられ屋根の葺き替え工事が進められています。工事の内容や現在の状況について、山口市教育委員会文化財保護課より紹介します。

## ○保存修理事業について

国宝瑠璃光寺五重塔は、修復を重ねることで建立以来600年近くもの長い間、その美しさが後世へと受け継がれてきました。記録に残るだけで17回の修理が行われています。

近年では、大正4年に全解体修理が行われ、また、国宝に指定された昭和27年には、屋根の全面葺き替え工事が行われています。

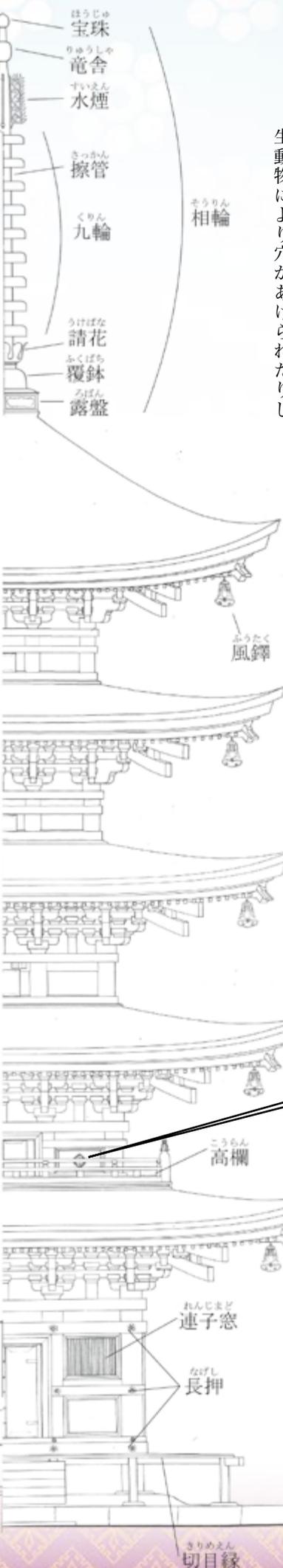
平成10年には、傷みが目立つ軒先を中心に部分的な屋根の葺き替えが行われましたが、最近屋根の全体的な経年劣化に加え、台風で軒先の檜皮が吹き飛んだり、野生動物により穴があけられたりし

ていました。また、初重から五重まで上に行くほど各重の屋根が小さくなっていくため、上の屋根からの雨だれを受ける軒先の傷みがひどく、特に全ての屋根から集まった雨だれを受ける初重は檜皮葺の野地である野地板が露出している状態でした。

これらにより、建物内部の雨漏りが危惧される事態となったため、令和4年12月から令和8年3月までの予定で、約70年ぶりとなる屋根の全面葺き替え工事が行われることとなりました。

## ○工事内容や計画について

令和4年12月から、樹木の移設



ここに大内菱が！



野地板の露出（初重、修理前）



素屋根建設中の様子

や仮囲いの設置を行った後、令和5年2月から工事の足場になるとともに修理中の五重塔を守るための「素屋根」を建設し、令和5年9月から上から順に屋根の葺き替え作業を行っています。



残された大正時代の檜皮（中央の色の違う部分）

### ○文化財保存修理の難しさ

文化財の保存修理は、その本質的価値を保存するための作業なので、古い部材でも残せるものは、可能な限り残すのが原則です。今回の保存修理でも、大正時代に葺かれた、初重、二重、三重の北側

今後は、初重までの屋根の葺き替えを行うとともに、避雷針の設置や二層にある大内菱の修理、各重にある風鐸の錆止め処置などを行った後、令和7年3月頃から素屋根の撤去作業を進め、鉄骨の解体が始まる令和7年の夏頃からは、改修後の五重塔の美しい姿が徐々に見えてくる予定です。

また、文化財の保存修理では、伝統的な手法や材料を用いることが基本ですが、一方で近年、生活様式の近代化や技術革新の進展によって、文化財修理分野以外での需要が減少し、市場が小さくなったため、生業として続けることが難しくなっています。文化財の修理に不可欠な材料の生産者や用具製作者等の高齢化、減少、後継者不足が深刻な課題となっており、用具・原材料の安定的な確保が困難になりつつあると言われています。

### ○現地見学会の意義

こうした文化財保存修理の現場やその技術、課題を知っていただくため、所有者であり、事業主体である瑠璃光寺の主催で「国宝瑠璃光寺五重塔改修現場見学会」が



見学会風景（葺き替え後）

### ○文化財保護のこれから

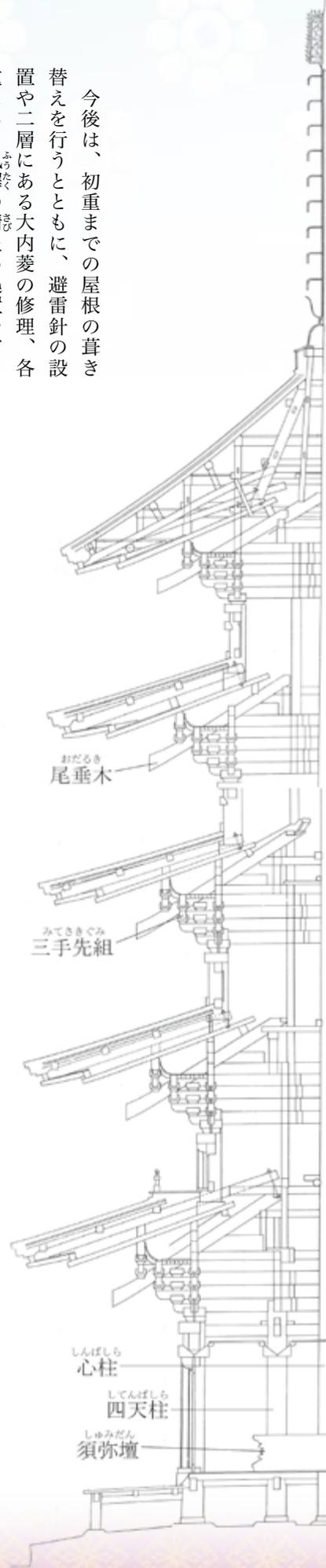
市内には、瑠璃光寺五重塔をはじめとする室町時代の文化財建造物が存在し、その多くに、檜皮や柿など植物性の屋根が葺かれています。植物性の屋根は、20年から30年ごとに葺き替えが必要となり

令和5年10月と令和6年5月に開催されました。参加者からは、「貴重な経験になった」「職人さんの技術はすごい」「文化財を大切にしたいと思った」などの声が聞かれました。

多彩な山口の宝を守り、活かし、未来へ伝えるために、「国宝瑠璃光寺五重塔保存修理事業」について支援を継続し、みなさまに知っていただくことに今後も努めてまいります。美しい国宝瑠璃光寺五重塔の完成後の姿を楽しみにしていただけますと幸いです。（山口市教育委員会文化財保護課）



素屋根と仮囲い



# 知ってる？ 瑠璃光寺五重塔のひみつ



心柱

それが何のために建てたの？

日本三名塔の一つに数えられる山口市内唯一の国宝『瑠璃光寺五重塔』は、もともと今の瑠璃光寺付近にあった香積寺の建物でした。香積寺は京都にならつて山口のまちをつくつたとされる大内弘世の息子・義弘が建立した寺院で、五重塔は応永の乱で戦死した義弘を弔うため、弟の盛見が建立したと伝わっています。以前は建築年代が不明でしたが、大正4年の解体修理の際に、部材から嘉吉2年（1442）の墨書が見つかり、建築年代が明らかになりました。



相輪

五重塔のひみつ

五重塔は外から見ると5階建てのようですが、内部はどうなっているのでしょうか。塔の基礎から相輪（屋根の上の金属塔の部分）の中まで心柱が通っており、初層のみ天井が貼られています。それより上は心柱の周囲に木組みがあるだけで吹き抜けになっています。初層には四天王と円形の須弥壇があり、阿弥陀如来坐像、大内義弘公像が安置されました。（改修期間中は本堂に遷座）

相輪の部分は、輪投げのように心柱に金属製のパーツが重ねて被せられています。そのうち九輪という部分には風鐸という鐘がついていて、



阿弥陀如来坐像

大内義弘公像

下からだと遠すぎてよく聞こえませんが鳴るようになっていきます。

## 美のひみつ

『瑠璃光寺五重塔』は屋根を瓦ではなく檜皮で葺いているのが特徴で、瓦葺きの塔に比べ屋根の曲線が優雅で美しく、最上層の屋根の先をより強く上に反らせることにより、塔を軽やかに見せています。また、上の層ほど塔身の幅を細くし、縁と高欄を二層目のみとするので、塔の姿を高くすっきり見せており、五重塔は大内文化の最高傑作とされています。

五重塔は建立後600年近くずっと今のような美しい姿だったわけではなく、明治時代の写真では自慢の檜皮葺屋根の反りを確認できません。建物はどうしても経年劣化により部材のゆるみやゆがみが生じますが、軒まわりは変形しやすく、隅にいくほど垂れ下がってしまう傾向にあります。写真のころには軒が下がり、上に反りあがってない姿になっていたものと考えられます。大正時代の大きがかりな解体修理により、五重塔は以前の美しい姿に戻ったのです。

明治時代の五重塔  
（山口県文書館蔵『龜山々顛より県庁を望む、其他』より）

## いつから瑠璃光寺？

江戸時代の初め、毛利氏によって香積寺の建物は解体され、萩の洞春寺の建材となりました。五重塔も移転の話があったようですが、山口の住民の嘆願によりこの地に残されたと伝えられています。当時から五重塔が山口のシン

ボルとして人々に大切に思われていたことがわかるエピソードです。江戸時代の絵図や幕末ごろの名所案内にも五重塔が描かれています。

香積寺の跡地には、元禄3年（1690）に仁保から瑠璃光寺が移転し、『瑠璃光寺五重塔』となりました。



『鴻城九図 瑠璃光寺塔』（山口市歴史民俗資料館蔵）  
幕末から明治初期ごろの山口の名所を描いた錦絵の一枚

# 檜皮葺とは？



檜皮葺とは、樹齢80年以上のヒノキの立木から、木の成長にもっとも大切な内部の形成層である白い色の部分を傷付けないように、丁寧に剥ぎ取った皮を、一枚ずつ重ねて屋根を葺く、日本古来から伝わる伝統的な屋根工法です。平安時代以降、京都御所にも使われ、出雲大社や厳島神社の屋根などにも用いられるなど格式の高い技法とされています。その最大の特徴が独特の美しい曲線を描く「反り」とされています。



竹釘

檜皮

檜皮は採取した後に半年間乾燥させ、長さ75cm、幅12〜15cm、厚さ1.5mm程度の規格に整えます。これを下の檜皮が12cm出るようにずらしながら上に向かって竹釘で打って重ねていきます。およそ60数枚の檜皮が重なり、厚さは7〜8cm

程度になります。

今回の国宝瑠璃光寺五重塔保存修理工事では、一定規格に整えられた檜皮を約25万6千枚使用します。

檜皮葺の耐用年数は20年〜30年程度ですが、鳥獣被害や屋根の形状による雨水の集中、建物の部位によって破損・腐朽状況は異なってきます。

山口市は、室町時代、日本海や瀬戸内海に通じる街道が開かれ、交通の要衝として発展してきました。海外貿易を盛んに行っていた当時の大名・大内氏が遺した「美しい五重塔」に「檜皮葺」が使われていることが「日本三名塔」と言われる理由のひとつかもしれません。



檜皮葺き作業



檜皮葺き屋根の「反り」（修理後）

鷺流狂言を観に行ってみませんか？  
やってみませんか？



子ども狂言教室

狂言は難しいというイメージが強いと思いますが、近年は小学校へワークショップや公演で行く機会が増え、楽しく体験や観覧することも私たちの姿が私たちに希望を与えてくれます。こどもだけでなく、海外の方も含めどなたでもっと気軽に触れても良いのでは？ 伝統とか古典とか、難しいことは取り除き、舞台、演劇の一つとして観る、演じるのも良いのではないかと考えます。こども狂言教室も毎年多くのこどもたちが参加し、発表会では一人の役者としてそこに立っているこどもたち



「やまぐち伝統芸能フェス in 菜香亭」に出演  
(演目：神鳴り)

が頼もしく見えます。今年も、山口鷺流狂言保存会が結成されてから70年という節目を迎えました。当保存会は、消えてしまっような狂言の流派鷺流を山口の町衆の手で残していこう、保存をしていこうと立ち上げられました。当初はやる人がいない、装束もない、発表の機会もない、ないない尽くしで、保存するのがやっとだったと伺っています。それが、これまで幾人もの伝承者によって、芸をつなぎ、装束を新調し、活動の機会を増やしていき、会員が増えてきました。最も少ない時期には2、3人というころもありましたが、現在、保存会員は約30人を数えます。

毎年秋に定期公演を開催し、一年の稽古の成果を披露しています。定期公演を行うようになった当初は県立山口図書館のレクチャールームが会場でしたが、次第に来場者が増え、山口市民会館小ホール、こちらも手狭になり、現在は山口県教育会館のホールで行っています。毎年約500席が満席になり、非常にありがたく思っています。

70周年を迎えた本年は、10月27日に野田神社能楽堂（市指定有形文化財）にて記念公演を開催します。普段はなかなか上演する機会のない演目を、会の主力メンバーが稽古に励んでいます。この野田神社の上棟式が行われた明治19年に、元萩藩のお抱え狂言方であった春日庄作が舞台を勤めたことをきっかけに、多くの弟子を取り、指導したのが山口鷺流狂言の始まりです。その後約140年に渡り、地域の皆様の力で受け継ぎ、保存会が結成され、新しい伝承者が生まれてきました。この先80周年、90周年、100周年に向けて伝承するためには狂言を愛好する観覧者、芸を伝承する伝承者、そして公演や日ごろの活動を支える

**鷺流狂言とは？**  
鷺流狂言は江戸時代初期に創始され、幕府御用を勤めた狂言の流派です。鷺流は、大蔵流・和泉流とともに狂言の三流儀をなしていましたが、明治維新後急速に衰微し、明治28年（1895）に宗家が絶えた後、それを継ぐ者はなく、流儀としては途絶えてしまいました。現在、鷺流が伝わるのは、ここ山口市、新潟県佐渡市、佐賀県神埼市千代田町高志地区の3地区のみとなっています。

（山口鷺流狂言保存会）

支援者が必要です。ぜひ多くの皆様に引き続きのご支援とご協力をお願いいたします。



演目：清水

# 「大村益次郎と木戸孝允」講演要旨

## —維新の目的と未完の軍制改革—

令和5年11月23日、山口県教育会館ホールにおいて竹本知行先生（安田女子大学教授）の講演会「大村益次郎と木戸孝允」を開催しました。大村が心血を注ぎ、木戸がそれを助けた、明治初年の建軍について語っていただきました。



竹本知行先生（安田女子大学教授）

### はじめに

安政5年（一八五八）に大村益次郎は、江戸で木戸孝允と出会い、その後、二人は互いに刺激しあい、盟友として絆を深めた。

### 主権国家の建設と建軍

明治新政府の課題は、外国と対峙し国を守り、法律による国内統治を実現する、主権国家を築くこととであり、そのためには、軍隊や警察が必要であった。

軍隊の創設つまり建軍には、各藩の軍隊を政府が国軍として編成するという大久保利通の案と、それを解体し、国民から兵隊を集めて、新たな軍隊を作るという大村と木戸の案があった。

山口ヒストリア講演会 8

長などの旧征討軍の解散を命じた。これに対して大久保は、兵隊たちの不平不満の鬱積を危惧し、薩摩・長州・土佐三藩の部隊を集めて、京都に駐留させたのち、江戸に移動させて新たな軍隊にすることを画策した。

大村や木戸が強硬に旧軍隊の解散を進めようとしたのは、二人が共有した維新の目的である「一新之名義」があった。それは主権国家を作り、万国対峙して国民が平穏に生活できる国を築く。これが重要と彼らは考えていた。

### 大久保の戦略と大村の信念

当時、木戸は版籍奉還により朝廷を頂点とする近代国家を建設することに力を注いでいた。それに慎重論だった大久保が全面協力を申し出た。この変革には抵抗が起きる可能性があり、実力つまり軍隊なしにはできないと説いた。

木戸は大目的のため、大久保案に賛同した。岩倉具視・大久保・木戸の三者で、京都駐留の三藩兵

による軍隊創設に合意した。しかし大村はこれに反対した。

### 版籍奉還後の官制改革と兵制会議

大久保が協力したことで明治2年6月までに大方の藩の版籍奉還が勅許され完了する。朝廷のもとに築かれる中央集権国家に合う政治機構を作る必要があった。この機に乗じて大久保は、新たな政治機構の構築を進め、版籍奉還後の兵制について、大村と直接対決することとなった。

京都駐留の三藩兵の取り扱いや大村が主張する徴兵による軍隊の創出等について議論したがまとまらなかった。この結果、当面は武士の軍隊が存続することとなり、事実上大村と木戸の完全な敗北であった。失意の大村は軍務官副知事の辞表を提出する。

### 大村の建軍策

大久保は、大村の後任に板垣退助をあてようとしたが、これに反対する木戸が大村を強く慰留し、大村もこれを受け入れた。

大村は三条実美にあてて、西洋に比肩できる新軍隊を創設する具体的なプラン「朝廷之兵制永敏愚案」を提出した。大村がフランス式の軍隊創設に拘った理由は、志願兵制のイギリスに対して、革命

を経たフランスは徴兵軍隊であったことが最大の理由だった。

### 未完の軍制改革

大村は、徴兵による軍隊創設を前提に、関西を拠点に士官養成のための軍学校（兵学寮）の建設を企画したが、その最中の明治2年9月に京都で遭難し、同年11月には帰らぬ人となった。

大村の遺策は、弟子で後継者の山田顕義らが進め、大阪兵学寮を開設した。明治3年10月、兵部省は陸軍をフランス式で統一することを布達し、また11月には徴兵令の一部実施である徴兵規則が公布された（翌年に無期延期）。

これらの実現は、大村の死後、その後継者たちを支えた木戸によるところが大きかった。大村の建軍構想は、封建的な制約の中で漸進的に進められたが、明治4年の廃藩置県による藩の消滅によって現実のものとなっていかなかった。明治5年11月の徴兵告諭、同6年1月の徴兵令の施行により、大村が構想した兵制が結実した。



講演会の様子

# 山口市菜香亭 開館 20 周年記念イベント情報

山口市菜香亭が令和6年10月2日に開館20周年を迎えることを記念し、各種イベントを開催します。

## ●開館20周年記念特別展示 「料亭を彩る屏風」

- ・期間 令和6年9月4日(水)～10月28日(月)
- ・内容 菜香亭の所蔵品である料亭を飾った屏風の展示を行います。
- ・料金 大人100円・小人(小中学生) 50円
- ※9月・10月で展示内容が変わります。

## ●山口市菜香亭開館20周年記念×山口大 学公開講座「大内氏の歴史と饗応文化」

- ・日時 令和6年9月28日(土) 15時～18時50分
- ・内容 大内氏の宴についての講演と、「大内御膳」の会食を通じて、「食」の面から大内文化の魅力を再発見していただきます。
- ・料金 8000円
- ・申込 8月21日(水)から先着28名

## ●アート de おもてなし 「さいこうのおもてなし」

- ・期間 令和6年10月3日(木)～10月6日(日)
- ・内容 菜香亭に携わるアーティスト11人によるアート展示を開催します。芸術の秋をお楽しみください。

## ●源氏物語講座 「六条院を彩る(へみやび)って何?」

- ・日時 令和6年11月2日(土) 10時30分～11時45分
- ・講師 森野正弘氏(山口大学大学院(東アジア研究科)教授)
- ・内容 『源氏物語』で、六条院を舞台に繰り広げられる(へみやび)の業を紹介し、(へみやび)について考えます。
- ・申込 9月18日(水)から

## ●NHK大河ドラマ「光る君へ」展

- ・期間 令和6年11月1日(金)～11月10日(日)
- ・内容 NHK大河ドラマ「光る君へ」の紹介展示を行います。

## ●平安のしらすへ十二単お服上げ実演

- ・日時 令和6年11月9日(土) 18時～20時、10日(日) 10時～12時
- ・内容 十二単のお服上げ(着付け)実演を開催します。
- ・申込 10月16日(水)から

## ●企画展「山口の近代建築と菜香亭」

- ・期間 令和6年11月13日(水)～12月27日(金)
- ・内容 山口の近代建築と菜香亭建築の歴史を紐解く企画展を行います。
- ・料金 大人100円・小人(小中学生) 50円
- ・講演会「菜香亭と歴史まちづくり」  
日時 令和6年11月16日(土) 13時～16時

## ●山口市菜香亭開館20周年記念×山口× セナ倶楽部30周年記念 神田京子独演会

- ・日時 令和6年11月23日(土) ①13時30分 ②18時
- ・内容 講師 神田京子による独演会  
①新作講談「大内義弘伝く命の炎を燃やした男」  
②講談「渋沢栄一伝く繰り返さない、明日へ」
- ・申込 9月18日(水)から商工会議所(TEL:083-925-2300)

## ●山口市歴史叢書

- ◎『山口市史 史料編』全8巻  
「大内文化」「考古・古代」「中世」「近世1」「近世2」「近代」「現代」「民俗・金石文」(各巻七、三三〇円)
- ◎『山口市史』(昭和57年刊、平成9年追補) (四、四〇〇円)
- ◎『山口市歴史叢書一』  
『山口市の金石文―阿東・徳地・小郡・秋穂・阿知須編―』 (二、四三〇円)
- ◎『山口市歴史叢書二』  
『山口市旧宮野村役場文書の研究―近代日本の変革期における地域社会―』 (二、八三〇円)
- ◎『大内氏受発給文書目録』  
※PDFファイルにて公開中  
◎目録ご利用方法/大内文化まちづくりホームページ <https://ouchi-culture.com> (著作 山口市) 上の、「大内氏・大内文化の歴史」↓「大内氏関連書籍」↓大内氏受発給文書目録にアクセス、PDFファイルを開いてください。ダウンロードも可能です。県立山口図書館、市立図書館には図書として配架されています。

## ●山口市幕末維新史跡ガイドブック

- ◎『山口市幕末維新史跡ガイドブック』※残部僅少(七一三円)

## ★既刊 『山口市史』ほか書籍販売のご案内

- ◎『山口市幕末維新人物ガイドブック』※残部僅少(五〇九円)
- ◎『西国一の御屋形様 大内氏がわかる本』全三巻  
「入門編」「興亡編」「文化交流編」(各巻六五〇円)
- ◎『山口市歴史叢書一』  
『山口市の金石文―阿東・徳地・小郡・秋穂・阿知須編―』 (二、四三〇円)
- ◎『山口市歴史叢書二』  
『山口市旧宮野村役場文書の研究―近代日本の変革期における地域社会―』 (二、八三〇円)
- ◎『大内氏受発給文書目録』  
※PDFファイルにて公開中  
◎目録ご利用方法/大内文化まちづくりホームページ <https://ouchi-culture.com> (著作 山口市) 上の、「大内氏・大内文化の歴史」↓「大内氏関連書籍」↓大内氏受発給文書目録にアクセス、PDFファイルを開いてください。ダウンロードも可能です。県立山口図書館、市立図書館には図書として配架されています。



好評  
販売中!

編集後記  
今回のヒストリア作成は、五重塔保存修理事業関係者の方、山口鷲流狂言保存会にご協力いただきました。ありがとうございました。

編集・発行 山口市交流創造部文化交流課  
歴史文化のまちづくり推進室  
☎753-8650 山口市亀山町2-1 ☎083(934)4155  
E-mail: bunka@city.yamaguchi.lg.jp  
印刷会社 株式会社マルニ  
※本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。再生紙を使用しています。

ガイドブックや「大内氏がわかる本」は市内の一部書店等での取り扱いもあります。詳細は市のホームページを御覧ください!

